



キャンパス・コラム

「意味」は自分で作ろう！

テレビ局から大学という世界へ移ってすぐに、FLPジャーナリズムプログラムというゼミを持たされた。FLPというゼミ自体、私にとっても、ゼミに集まってきた学生にとっても、曖昧模朧とした意味不明なものであった。

私はとりあえず1年間、ドキュメンタリー制作の基本を教えたのだが、ジャーナリストに向いていると感じた学生は皆無だった。私の言動から、「自分たちは見捨てられる」と察したゼミ生たちは、春休みに独自の合宿を行った。そこで「恋しくて、野猿」という作品が生まれた。内容は単純なロードムービーだったが、これを見て大爆笑してしまった。

私は、「これなら番組ができるかもしれない」と思った。さっそく、学生たちと「多摩探検隊」という10分番組を制作し始めた。2004年5月から多摩テレビで放送が始まり、あっという間に、5局で放送されるようになった。そして、放送

開始から2年目を待たずして、今度は首都圏の12のCATVで作る「東京デジタルネットワーク」でデジタル放送されることになった。これでアナログとデジタルをあわせると合計17局でレギュラー放送が実現したことになる。各放送局編成担当者の評価は「マジ面白い番組」だという。

この「多摩探検隊」制作活動から多くの派生作品が生まれ、映像・放送業界でも評価され始めている。「地方の時代」映画祭、宝塚映画祭、東京ビデオフェスティバルなどのコンテストで上映、入賞。すでに大舞台でスポットライトを浴び、「監督」と呼ばれる学生も出てきた。活動は、新聞各紙で紹介され、NHKラジオにも学生が出演し、制作された作品はJICAの教材にもなった。そして、NHK、新聞社などに内定が決まった学生も出てきている。

FLPという意味不明なゼミにあつまった意味不明な教員と学生。最近になって、「意味は自分たちが作ればいいんだ」、ということがわかってきた。

「多摩探検隊」ホームページは、こちら。

<http://www.tamatan.tv>

広報委員 松野良一（総合政策学部教授）